

---

# 仮想現実へようこそ

文月スグリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮想現実へようこそ

### 【Nコード】

N6621T

### 【作者名】

文月スグリ

### 【あらすじ】

女子大生長井美香が体験する不思議な数日間。

## 序章

雨の音で目が覚めた。時計は6時を指している。目覚まし時計をセットした時間より30分早い。いつもだったらまだ布団のなかでまだ寝ている。しかし今日は大切な予定があった。起きると、直ぐに身支度を始めた。

二日前、大学から帰宅後にポストの中身を確認すると、宅配ピザのチラシとともに一通の葉書が入っていた。

不思議な手紙だった。表には私の名前が、そして裏には日付と地図が書いてあった。差出人の名前は無い。もしその時、レポートなり買い物なり友達から着信があったり、とにかくどんな些細なことでも用事があったなら、私は間違いなくその不気味な葉書を捨てていた。しかし、そのときの私にはすべき事が何も無かった。退屈だったのだ。そんな私がその葉書に興味を持ったのは、至極当然のことだった。

裏面の地図の下には、二日後、つまり今日の日付と『必ずこの手紙をお持ちください』と一文書いてあった。その日から大学の夏休みである。今期は追試を受ける心配はない。バイトも先週辞めた、というよりクビになったばかりだしサークルにも入っていないければ彼氏もない。実家に帰るのも一つであるが、地元に戻るのは気が進まなかった。

とにかくやる事が無くて退屈だった私は、指定日時に指定の場所に行くことにした。不安が無いわけではないが、指定場所が駅であつたことが多少なりとも私に安心を与えていた。

そして今日を迎えたわけである。今日のことを友達に話したかったが、きつと行く事を止められるので誰にも話していない。その事を今になって少し後悔した。

指定の駅までは一時間近くかかる。あまり人が乗らない駅であるため、座る事ができた。少し緊張している。それを紛らわすために、

これから行く駅に何があるかを想像し始めた。宗教の勧誘か何か売りつけられるのか、それともただのいたずらだろうか。もし映画のエキストラの募集か何かだったら、芸能人に会えるかもしれない。大きな不安とわずかな期待から、鼓動がだんだん大きくなっていく。いずれにしても次の飲み会で話のネタにはなりそうだ。そう思うと、少し笑えてきた。

それにしてもこんな朝早く、しかも雨の中で、何があるかも判らない場所へ行く自分が、少し間抜けに思えた。子供の頃から好奇心旺盛だと言われていたが、未だに変わっていないようだ。その良し悪しは判らないが、今回ばかりは良しであることを願った。

駅に着くと、改札を出て地図に書かれている集合場所へと向かった。葉書に書かれている時間より20分ほど早い。私のほかにその場所には誰もいなかった。とりあえず、時間を潰すために近くのコーヒーショップへ行き、ブラックコーヒーを頼む事にした。

コーヒーが来ると、私は窓側の席へと座った。その場所から集合場所が見えるからだ。飲みなれないブラックコーヒーを口に含みながら、時計と集合場所を交互に見ることにした。

10分が経ち、15分が経った。それでも誰もそれらしい人はいなかった。『誰かのいたずらだった』そう結論をだそうと思っただが、わざわざ一時間以上かけて来た手前、何も無いままで帰るのは癪だった。仕方なく、空になったカップを捨て集合場所に向かった。

集合場所に着いても、やはり私のほかに『何か』を待っている人はいなかった。それでも諦めきれずに、辺りをキョロキョロと見回しては時計が、予定時間を表示するのを待った。

「すみません」

ちょうど、時計が予定時間である9時を示した時だった。後ろから男の声が聞こえた。振り返るとタキシードを着た、いわゆる執事の格好をした男が立っていた。細身の体と白髪、そして白い髭がいかにもな秀囲気をかもし出していた。

「長井美香様でしょうか？」

「はい」

「お待ちしておりました」

警戒心丸出しの私を他所に、男は深々と頭を下げた。少ないとはいえここは人通りのある場所である。そんな中で見ず知らずの執事に頭を下げられ、一刻も早くここから逃げ出したくなつた。

「失礼ですが、お手紙を確認させていて頂いてもよろしいでしょうか？」

「は・・・はい。どうぞ」

そういつてバッグから手紙を出そうとしたが、一緒に入れていたお財布を落としてしまった。私とは対照的に、落ち着いて財布を拾うと私に返し、私からは手紙を受け取つた。

「確かに。本当によろこそいらつしゃつてくれました。主人に代わりお礼申し上げます」

そう言つてまた、男は深々と頭を下げた。

「いえ、そんな、あの・・・」

私も、ペコペコと何度も頭を下げた。頭の中が真っ白だつた。

「まずは私の自己紹介をさせていただきます。私は黒川と申します。とある方の執事をしており、本日はその方の申しついで長井様をお迎えに上がりました」

私の動揺を他所に、黒川と名乗る執事は、淡々と話を始めた。

「さて、本日も越し頂いたのは、長井様にあることをして頂きたかつたためです。詳しくは私の口から申し上げられませんが、あるゲームのモニターになつて頂きたいと主人は申しておりました。詳しい説明は、場所を変えてお話しします。よろしいでしょうか？もちろん、断りたいとお思いになられるのであれば、このままご帰宅して頂いて構いません。本日分の往復の交通費は支給させていただきます。どうなさいますか？」

黒川のゆっくり丁寧な言葉は、思考回路の停止した私の脳が再起動し、状況分析を始めるのに十分な時間をくれた。もし宗教の勧誘や怪しいセールスだつたらどんなに楽しかつたらうと思つた。

「あの、ちょっと質問なんですが、私だけなんですか？」

再起動した私の脳は、最終判断を下す前に当然の疑問を黒川にぶつけた。と同時に、自分が少し落ち着いてきた事を認識した。

「この場所には、長井様だけです。しかし、他の場所でも同様に人を集めております。もし、長井様のように手紙を出した方全員が参加頂けるのであれば、この地区では50人程になります」

「詳しい説明を聞いてから、不参加も出来るんですか？」

「もちろんでございます。当方としては是非参加して頂きたいのですが、それは長井様のご意思になります。ただ、先ほど申しませんでした、詳しい説明というのは、ここから車で30分程行ったところで、今回ご参加頂ける方全員と一緒に行いたいと考えております」

「じゃあ、話だけでも」

「ありがとうございます。早速車にお乗り頂きたい所ですが、その前にアイマスクをして頂けないでしょうか。今回の件は色々と秘密にしないとならないことも多く、場所もそのひとつなのです」

黒川の案内した車の中には女性が一人、座っていた。

「研究員の黒川です。どうぞお乗りください」

普通なら初対面の、しかも研究員と名乗る人間に対しては、どんな天気な人間も少なからず警戒心を抱くだろう。しかし、黒川の容姿それをさせなかった。まるで人の良さそうなおばちゃんだった。後部座席に乗り込むと、黒川も隣に座ってきた。

「ごめんなさいね。しっかりとアイマスクを着用させるのが私の仕事なの。まさか、縄で縛って動けなくするわけにもいかないからね」

見た目の印象通りフランクな人だった。私がアイマスクをするとエンジンが動き出した。その音を聞いて、私は深く息を吸った。

「何か質問ある？答えられる範囲でなら答えるわよ。まあ、また後で詳しい説明はあるんだけどね」

車が動き出すと、すぐに黒川が口を開いた。

「それじゃあ質問します。これから何があるんですか？」

「当然の質問よね。そうね。簡単に言えばゲームのモニターをやってもらうの。私たちが開発した全く新しいゲームのね。何日かやってもらうことになるかもしれないけど、もちろんお給料はでるわよ。あなた、ゲームは好き？」

「実はあんまりやったこと無いんです。目がすぐに疲れちゃって」

「そう。でも大丈夫。そういう人でもすぐに、しかも簡単に出来るゲームだから」

「そうなんですか」

「自信作よ。内容はここでは詳しく言えないけどね」

「何ですか？」

「やっぱり産業スパイを気にしないといけないのよ。場所を秘密にしているのもそう。盗聴器の可能性も考えないといけないわ。だから、重要なことは気軽にいえないの」

「大変なんですネ。そういえば大学の講義で、研究結果を気軽に人に話しちゃ駄目だっていつてました」

「あら、あなた大学生？」

「はい。夏休みで退屈だったので参加してみたんです」

「そう、何を専攻しているの？」

「まだ一年生なので特に専攻は決まっています。ただ、化学に興味があるのでそっちに行きたいなどは考えています」

「これからどんどん楽しくなるわね」

「はい。そういえば中川さんはどんな研究をされているんですか？ やっぱりプログラミング関係ですか？」

「いいえ。脳に関する研究を行っているわ」

「脳ですか？それなのになんでゲームを？」

「ゲームと脳の間を調べている人は多いわよ。ゲームをしているときに、脳の何処の部分が活発に動くかとか、どの様に情報伝達されているか、そういつたことを調べたりしているの。まあ、私の場合ちょっと変わっているけど。すぐに判るわ」

それから30分ほど、私は中川と話を続けた。質問できたのは最

初だけで、後は中川のほうから私の趣味や、なぜ今回参加しようと思ったのかなど質問が続いた。

「研究所に着いたわ。でも、施設内に入るまでアイマスクはもうちよっと我慢してね。」

中川はそう言って私を車から降ろすと、私の手を引いて歩き始めた。後方で車のエンジンがかかる音がした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6621t/>

---

仮想現実へようこそ

2011年5月29日22時26分発行